

ジャカルタ日本人学校中学部の国際理解教育とその実践

前在インドネシア日本国大使館付属ジャカルタ日本人学校教諭
鹿児島県指宿市立北指宿中学校教諭 上治 ゆかり

キーワード：修学旅行、現地校との交流、職場体験学習、総合的な学習、安全

1 はじめに

ジャカルタ日本人学校はインドネシアの首都でこの国最大の人口密集地域である。インドネシアは毎年4%程の経済成長を遂げ活気にあふれている。そのため日本の企業もたくさん活躍しており、多いときは児童生徒合わせて1200名ほどが在籍していた。平成31年度には、近くにチカラン日本人学校が新設され、インドネシアと日本はより活発に交流が行われていることが分かる。また、歴史的背景として第2次世界大戦終了直後に多くの日本人がインドネシアの独立に尽力したことで現在世界有数の親日国になっている。そのため、街の中で現地の人々は日本人と分かると笑顔で挨拶が交わされる。日本ではつらい悲しい過去と、現在に至る問題をしばしば耳にする中、日本人としての誇りと光を感じることができる国である。過去にどのように各国と関わり、国際交流を進めていったのかがこれからの日本の世界での存在感を大きく左右することを実感した。今、世界はグローバル化している。そのため対岸の出来事と思われていたテロリズムや暴動も日本人だから大丈夫だとは言いきれず危機も身近に迫っている。コロナ禍以前の外務省の危険渡航レベルはバリ島を含むインドネシアのほぼ全域がレベル1でパプアの地域に至ってはレベル2だった。このような状況のもと、如何に日本の教育課程を基として世界の中の日本の在り方を考えていける子どもたちを育成することが在外の日本人学校に課せられている。ジャカルタ日本人学校では週に2時間総合的な学習の時間が設定されている。総合的な学習の時間では小学校低学年からインドネシア語の学習もあり、現地理解を深めている。中学2年では週2時間の内、1時間をインドネシア語の学習、残りの1時間を行事の内容と組み合わせて学習を進めてきた。行事と関係のある内容の中で中学2年生では修学旅行がとて大きなものであり、子どもたちの関心も非常に高い。3年間の滞在期間にインドネシアでは、テロや自然災害などの懸案が多くみられた。これらの状況を踏まえ危機管理を重点的に考慮し、中学2年主任として新たな修学旅行計画を立てなければならなくなった。今回は、2年間にわたって中学2年生に携わった経験を中心に紹介する。

2 中学2年生の実践

(1) 総合的な学習

週に2回行われる総合的な学習は、インドネシア理解の一環としてインドネシア語と行事に関係のある学習を行っている。

① インドネシア語

小学校から学習しているインドネシア語は中学部では4つのスキル別に分かれ取り組んでいる。ジャカルタ日本人学校に所属している現地のインドネシア語教師5名が子どもたちの学習や学校生活で必要な通訳を手伝っている。難易度の高いクラスの子どもの多くはインドネシア人と日本人を両親に持つ子どもたちで、ネイティブと同等の流暢な会話をし、文章も読み書きすることができる。しかし、長期滞在をしてもなかなかインドネシア語習得できない子どもたちも多い。その要因として考えられることとして2点あげられる。1つは普段の使用量である。インドネシアに在住しているからといって、日常での使用頻度は子どもたちにとって多くはない。学校生活は、日本人学校なので日本と同じカリキュラムを学習するので日本語である。

登下校もスクールバスや自家用車を利用しているため、運転手との会話も決まった単語や文章だけで不自由をすることも少ない。当然家庭では日本語を使用している。次に、買い物、食事、遊びなどのプライベートな場面ではインドネシア語よりも英語が主流になる。在外期間が長いからといって現地の言葉を必ずしも習得できるわけではない。修学旅行先のマレーシアでは、公用語として英語、マレー語、中国語が話されており、マレー語圏のインドネシア語を使用し、会話練習を試みたケースもある。

② 国際理解・異文化体験

毎年3学期になると日伊交流ということでインドネシアの現地校との交流が行われる。交流している学校は3校あるが、平成31年度の中学2年生はタラサルフィア校と合唱を披露しあったり、福笑いとかかるたなどの日本の遊びで親睦を深めたり、現地校からは民族舞踊など各学校で特色あるものを紹介してくれた。インドネシア語を使ってコミュニケーションをとることが目標としてあったが、英語が活発に使われていた。



③ 職場体験学習

中学2年生は毎年、日本と同様に職場体験学習を行っている。子どもたちは職場体験学習を楽しみにしており、修学旅行と同じく学年の行事の中ではとても大きなイベントになっている。

ア 職場の選定と活動準備

日本の職場体験学習は校区内にある身近な事業所で子どもたちが体験活動を行っている。ジャカルタでも近場で事業所を考えているが、日系の企業を見つけることは難しい。また、多種多様な職種となるとなおさら厳しいため、ジャカルタ日本人学校からは遠い工業地域まで目を向けなくてはならない。平成31年度の事業所は学校から半径50km以内の広範囲でお願いすることになった。外務省の危険地域ではレベル1の日本国外ということもあるため、保護者ボランティアが必要である。

イ 実際

当日はモスクに集合し、事前に手配していたバスと公用車で事業所ごとに出発した。2日間にわたり製造、大使館、小売り、報道、教育、飲食、美容といった業種別で実施した。事前学習では企業についての調べ学習、自己紹介カードの記入、マナー講座など、体験学習の振り返りでは、体験へのお礼状を書き、実際の写真や感想を基にパワーポイントを作成し事業所を招待し発表会を行った。安全面を考慮し、全ての事業所に保護者ボランティアの引率をお願いした。そのために保護者へ2か月ほど前に依頼文を配布し、ボランティアの決定後、事業所ごとに詳細説明が必要だった。

ウ 課題

インドネシアという地で職場体験学習を行っていくことは、これまで日本で行っていたこと以上にとても難しいと感じた。2年間中学2年部に所属し、この行事を行ってみると、まず、受け入れてくれる事業所を見つけることが非常に困難だった。毎年快く引き受けてくれる企業もあるが、70名ほどの生徒全員が分散して活動できる所となると20社ほど協力して頂く必要があった。場所がそれだけ多く、広い範囲になると保護者ボランティアの力やバスや公用車の配置やタイムスケジュールの調整も大事になってくる。また、インドネシアの法律や就労のイミグレーションも関わる難しさがあるので、改めて検討していく必要がある。ただ、職場体験学習は世界で活躍する日本の企業の姿を間近で見て体験できる素晴らしい機会であることは間違いないので、これらの課題を乗り切って、いかに運営していくのか今後を見守っていきたい。

(2) 修学旅行

主任を務めた年度から修学旅行先をインドネシア国内からマレーシアに変更することになり方向性が固まった。この修学旅行がどのように決まってどのように行われたのかその流れについて説明する。

① 検討会

平成 29 年度の保護者説明会では、修学旅行はインドネシアのバリ島ということで準備を進めていた。しかし、インドネシアのバリ島のアグン山が 9 月の下旬より警戒レベル 4 になり、住民の避難勧告まで出る状況になった。このような状況ではバリ島への旅行は難しいということで何度も検討会が行われ、延期していたが、ついに 11 月 21 日に噴火し、26 日にはマグマ噴出や噴煙が 4000m まで上がり、警戒レベルも最大に引き上げられ、国際空港も閉鎖される事態に陥った。そのため、修学旅行は、バリではなくジャカルタから近いジョグジャカルタに変更となった。最初、子どもたちはとても残念がっていたが、級友との旅行に意味を感じ、学校へ帰校したときは、すがすがしい姿で帰ってくる事ができた。しかし、平成 30 年度は「修学旅行はどこへ行くか、どうするのか」そこからのスタートとなった。一番に考慮しなければならないのは安全面であった。インドネシアに住んでいるので、せっかくだから現地を体験させたいと考えるのは当然のことだが、インドネシアを調べれば調べるほど宿泊を伴う集団学習での難しさが浮き彫りになってきた。インドネシア自体は日本の国土の 4 倍もあるため多種多様な自然、民族や文化も豊富で実際に現地を訪れて学習する意義は非常にある。しかし、外務省渡航レベル 1、日本と同様に地震大国、火山も非常に多い。平成 29 年のアグン山噴火、平成 30 年のジョグジャカルタのムラピ山噴火、バリに近いロンボク島での M6.4、平成 31 年は再びロンボク島で地震と近年頻繁に自然災害が起り、被災した人がいたり、交通などのインフラに支障をきたしたりするなどの事例がおこっている。このことからインドネシア国内の宿泊を伴う集団行動は難しいということで次の修学旅行先を選定することになった。候補地としていくつか上がったが、最終的に物価、時間、治安、自然災害、言語も考慮してマレーシアに決定した。そして、この決定が 2 年間続くことになった。

② 事前下見

旅行業者と見学先が決まった後、6 月中旬に下見にいった。検討事項は安全面、空港の過ごし方、出入国、無線、食事、トイレ、施設の状態、MRT 地下鉄、通信機器（携帯電話）、ブラザー&シスタープログラム（自主研修）、観光地とパスポートの管理についてだった。

インドネシアのスカルノハッタ空港は子どもたちも頻繁に利用しているが集団行動ではパスポート管理が大きな問題となる。インドネシアパスポートの子どもたちは出国審査と入国審査の場所が違うため職員の配置を考えなければならなかった。インドネシア国籍所有者は別レーンになるので、日本人職員 1 名はインドネシア人レーンで誘導した後、日本人などの外国人レーンの最後尾に戻ってもらう。イスラム教ということで宗教上手荷物検査も女性レーンと男性レーンが設けられることがあるのでこれも注意が必要である。無線に関してはバッテリーがついているので機内持ち込みにしなければならない。携帯電話に関してはインドネシアを出発する前に海外ローミング設定を行う必要がある。食事は、すべてをハラル食にしてもらい、イスラム教の子どもたちも安心して食べられるものにした。「自然散策」は普段目にする事ができない珍しい植物や動物を観察できるので体験学習の候補としていたが、蛭がとて多く危険である点から「ピューター工場」で工場見学とハードノッキング体験を行うことに決定した。ブラザー&シスタープログラムは現地の大学生と英語でコミュニケーションをとり、地下鉄や公共の乗り物を利用してクアラルンプール市内を散策するというものである。ジャカルタと違い、街の中を自由に歩くことになるので、歩道や地下鉄が安全なのかを確認して回った。マラッカ散策で世界遺産地区とジョンカーストリートのコースと集合場所の確認をした。午後の自由散策の場所で使用する無線とホテルレンタル携帯電話の通信の状況チェックをしての職員の配置について検討した。王宮、お土産店から空港までの時間を調べた。4 日間で行う工程を 3 日間で確認してきた。そのため時間に関しては、若干目測というところもあり、注意しなければならなかった。

③ 安全対策

アレルギーに関する対策としては、参加申込書の中に記載欄を設けて、リストを作成し、レストランへ事前送付した。重度のアレルギーの子どもは、アレルギー対応のレトルト食品を保護者付き添いのもとで対応した。ハ

ラル食については事前にレストランに報告し、すべてをハラル食でお願いした。地下鉄利用時は現地の大学生が行動を共にし、ホテルレンタルの携帯電話を班長が持ち、大学生の携帯電話を全てリストにして、職員がいつでも連絡できるようにした。2年目には現地の携帯電話を3日間レンタルし、自由散策の時には班のリーダーといつでも連絡をとれるように対応した。パスポートの管理に関しては、ホテルのロビーで2重のキーの厳重保管ができるように対応した。海外保険は日本国外から加入できるものがあり、救援者の費用も含まれキャッシュレス治療が可能だった。

④ 現地での実際の活動

学校へ朝5時集合し空港へ向かった。朝の早い時間にもかかわらず保護者や職員が見送りに来てくれた。空港でのパスポートの管理についても事前に何度も子どもたちにレクチャーした甲斐があり、紛失したり、そのまま持ち歩いたりするようなことはなかった。パスポートに関しては一人ひとりタグをつけ、班の番号と通し番号を作り、修学旅行用の名簿でチェックをし、1日目の間だけは職員が持ち歩かなければならなかった。子どもたちのパスポートを預かっているため職員へも再三注意喚起する必要がある。セントラルマーケットなどの散策の時は職員間の連絡は無線が有効だった。ピューター工場は工場を見学後、皿づくりを行い一生懸命子どもたちも制作活動に打ち込んだ。バツー洞窟はヒンズー教の寺院で600段もある美しい階段がある場所で、頂上にある洞窟の奥まで興味を持って見学していた。職員も奥へ上るチームと階段の下で待機するチームに分かれ、安全にバスまで誘導することができた。昼食はマレー舞踏を鑑賞しながら食事ができる場所で特別に舞台上上がり、バンブーダンスや吹矢などのパフォーマンスに参加し、会場を盛り上げていた。午後はクアラルンプール市内のパビリオンで、ブラザー&シスタープログラムの大学生とのマッチンググループで散策を始めた。子どもたちの中にはこの大学生と英語でコミュニケーションをし、観光地を散策するプログラムがとても良い経験になったと感想に書いていたものもいた。マラッカでは世界遺産地区や海のモスクの見学、ジョンカーストリートの自由散策を行った。夕食会場は舞台のある宴会場で学級ごとに発表会をし、旅行の思い出作りをすることができた。王宮見学後、すぐ空港へ向かいスムーズにチェックインを済ませ、ゆとりをもった対応ができた。また、職員の無線の機内持ち込みに関する公文を事前にクアラルンプール国際空港のセキュリティー担当へ送っていたため、何事もなく飛行機に乗ることができた。事前指導で子どもたちのパスポートの管理については何度もシュミレーションし、当日はバックの中にしてしまうところまで職員で見届けたので、紛失することなく無事に終えることができた。



⑤ 課題

日本国外からの修学旅行は、想像以上に安全対策に万全でなければならない。今年度のコロナ禍のような事案が発生する可能性が今後はあるので、感染症についての安全対策も明記していく必要がある。

3 おわりに

3年間のジャカルタ日本人学校での教員生活は、日本とは違った体験をたくさんすることができた。担当教科の理科に関しては日本とは変わらなかったが、総合的な学習や学校行事などは現地の特色ある内容を盛り込んだ企画だったのでとても新鮮な気持ちであった。異文化交流は現地で生活しているからこそ経験できるものであり、現地の学生とコミュニケーションをとったり、現地の学校を訪問して学んだりしたことは人生の中の財産になっている。また、異国の地の修学旅行は特に考えさせられることが多く、危機管理、行事企画、職員の連携、迅速な対応の大切さを改めて感じることができた。これらの経験を基に今後の教員生活でも役立てていきたい。